

論文題目：「流れと顔——レバノンにおける民族誌的研究——」

氏名：池田昭光

論文の構成

序論——問題の所在.

第 I 部 理論的検討

第 1 章 レバノンにおける「宗派主義」

第 2 章 中東研究における個人への着目

第 3 章 パトロン=クライアント関係論——システムと行為

第 II 部 民族誌的検討

第 4 章 「流れ」

第 5 章 「流れ」と戦争

第 6 章 「顔」

結論

論文の要旨

序論では、本論文の問題意識をこれまでの人類学的研究との対比で位置づけた。レバノンは一般に、多様な宗派の間で権力配分を行い、それらの勢力均衡にもとづいて国家や社会が成立していると考えられてきた。これは「複合社会」や「エスニシティ」といった、国民国家を複数のエスニック・グループから構成されるとみなす見方になぞらえることができる。この種の研究は、ある集団を他から区別するといった発想を、現地住民と調査者との間で共有することを前提としがちである。

しかし本論文は、この前提が成立しがたい状況を出発点とする。さまざまな宗派が存在し、現地住民の間でそれらが相互に他から区別される事態は確かに認められる。そのこと自体を本論文で否定するものではない。しかし、そのような区別を人びととの間で共有し

つつ、集団間の関係について尋ねると、彼らは区別自体が存在しないかのように答える。

ならば、複数の宗派があり、それらの相互関係によって全体社会が構成されるという、従来のとらえかたとは別の枠組みが人びとの言動の背後に控えているのではないか。それを抽出することにより、従来のレバノン像を再考することができるのではないか。本論文は、こうした課題に取り組むものである。

そこで、本論文全体を二つに分け、第Ⅰ部（第1～3章）では予備的な整理としての「理論的検討」を行い、第Ⅱ部（第4～6章）では、第Ⅰ部で整理した課題を、筆者が得た民族誌的資料をもとに考察する「民族誌的検討」を行った。

第1章では、従来のレバノン像を踏襲しつつ、本論文に関連するかぎりでは、レバノンの社会を概観するための基礎的情報（宗派主義の概念、代表的宗派、レバノン内戦以降の歴史的経緯）をまとめた。それにより、調査時の2000年代には、政治情勢の二極化が見られることを強調した。他方、こうした二極化の状況自体を醒めた目で眺めるという、住民のまなざしが認められることも指摘した。これにより、宗派主義には「生きられる」側面があり、フィールドワークを通じて後者の側面を把握することにより、従来の枠組みを再考する余地が生じることが示された。

第2章では、こうした問題意識や課題設定が、これまでの中東研究の諸成果において部分的に論じられてきたことを、先行研究の整理をもとに論じた。ここで特に重視したのが、板垣雄三の「アイデンティティ複合」論、三木亘の「人間移動のカルチャー」論、堀内正樹の「非境界」論である。三者の議論は、いずれも個人の次元から中東諸社会の考察を行う点で共通している。「組み換え」「移動」「対話」などの観点から、人間関係の動的な側面を描き出す意図を持つ点でも、相互に通底するところがある。また、いずれの場合も、社会科学において一般的に持ち出されがちな、集団やカテゴリを前提とする発想を相対化する志向性を有している。他方で、コミュニケーションの側面、特に言語化しがたい側面については、これらの議論には、なお具体的に検討すべき余地があると言える。

第3章では、個人に焦点を当てながら集団論的な枠組みを相対化するという本論文の課題に、部分的とはいえ本論文に先駆けて取り組んできたレバノン研究の事例としてのパトロン＝クライアント関係論を振り返り、本論文の課題に沿った形で批判的な再検討を行った。パトロン＝クライアント関係論は、構造機能主義に代表される、集団志向的なパラダイムに対する批判から生まれ、フォーマルな組織や制度が未発達であると考えられた地中海地域を、個人間の関係から社会を説明する意図で用いられてきた。しかし、レバノンを対象と

する議論、とりわけ政治学的研究においては、このような視点が今度は過度の図式化に陥ることとなった。そこから、あたかもある系列のパトロン＝クライアント関係が固定化し、他の系列とは競合関係にあると自明視する見方が生じた。そこで、筆者の調査資料をもとに、従来考えられてきたようなクライアント相互の競合関係は、それほど固定的なものとは言えないことを、クライアントにあたる人びとの自宅にある肖像写真の掲げ方や、彼ら同士の突然の交流といった例をもとに示した。

第4章以降では、より本格的に筆者の調査資料を用いた検討を行った。本章では、調査地の人びとが、一方では自他の宗派的差異を意識し日常的に話題にしながらも、差異が露わになりそうな時、また、調査者が差異を前提にするまなざしを向けたことが意識された時、彼らはそうした差異を打ち消すような言動を取ることに着目した。本章では、こうした言動が日常の微細な場面に現れることを、ある老人がシャッターを閉める場面を詳細に描くことで示した。これは、自己の意図、動作、境界の設定が露わになることを避けつつ、しかし、結果的にシャッターを閉めるという具体的行為が着実に遂行されていく現象と言える。こうした現象には現地概念が存在しないように見えるため、筆者の方で、暫定的に「流れ」と呼んだ。

第5章では、第4章で見たシャッターの閉鎖という「非政治的」行為とは対照的に、当時のレバノン情勢における二極化や宗派間の緊張という背景が関連する事例——ある八百屋の次男の若者が、対面的な状況において、筆者が本当はスパイなのではないかと疑い、言い争いのようなになった後、何を怖がっているのかと尋ねると、戦争が怖いと答えた出来事——を扱った。本章ではこの事例を、S・ハラフ、A・アパデュライによる戦争や暴力の議論を参照しつつ、類似の状況が若者の言動に認められることを論じた。すなわち、戦争と日常との区別が曖昧な状況にあること、その結果、身の回りの他者の素性から確実性が失われる状況があること、である。こうした不確実性の中で、境界の明確化と曖昧化の往還が見られる点に「流れ」が認められる。こうした指摘を通じて、「流れ」は些細で非政治的な日常の場面に限定されるものではなく、政治や暴力とも結びつくことを示した。

第6章では、調査地の人びとと筆者との対面的な状況というよりは、むしろ彼ら同士の間で生じた出来事——すなわち、より広範囲の関係性がかかわる例——を検討した。そのために、本章では新たに「顔」の議論を現象学から導入し、鷲田清一の著作を手掛かりに、顔の対象化（その不可能性）を中心に予備的な整理を示した。

そのうえで、ある老人が知人から古着の提供をもちかけられ、隣人と筆者を派遣して受

け取ろうとしたものの、結局は当のモノを得ることがかなわなかったという事例を検討した。そこには、「流れ」は必ずしも毎回首尾よくなしとげられる現象なのではなく、そのほころびと紙一重であることが認められた。

結論では、「流れ」の現象のみでは、ともすれば戦略性、功利主義的側面に単純化された理解（方法論的個人主義にもとづく理解）をもたらしかねないが、「顔」への着目は、そうした単純化を防いでくれ、見る一見られるといった関係性の動態を扱える利点があることを指摘した。そのうで、こうした知見に立つならば、顔の背後に「素顔」を読もうとしたり、顔をそむけ、またそむけられたりするという、具体的な相互行為の積み重ねの中で宗派間の関係が緊張したり、あるいは宗派を超えた関係性が生成されたりするのではないかという視点が開かれてくる。このような議論を行うことで、個人の多様な行為に着目することにより、宗派主義的な枠組みの相対化につながることを展望した。